

郷土博物館・文学館だより

特別展

「生誕120年記念 折口信夫の世界 —その文学と学問—」

当館では昨年の10月17日から12月17日まで、生誕120年を迎えた折口信夫の特別展を開催しました。折口は明治20年（1887）に大阪で生まれ、その後國學院大學に進み文学や民俗学・芸能など幅広い分野を研究しました。歌人としても活躍し、釋迦空という名前でたくさんのお歌を残しています。展示では彼の自筆原稿や自製本のほか、彼の小説『死者の書』を人形アニメーション映画化した川本喜八郎氏の人形も、あわせて展示しました。この特別展は國學院大學との共催展で、大学でも折口に関連する文化講演会や人形アニメーション映画『死者の書』の上映会なども行いました。



特別展会場入口の様子

対談講演会

「人形アニメーション映画『死者の書』を語る」
講師の川本喜八郎氏（右）と安藤礼二氏（文芸評論家）

特別展

「伝説のつわもの 渋谷金王丸」

現在、3月18日まで特別展「伝説のつわもの 渋谷金王丸」を開催しています。

渋谷金王丸は、渋谷にゆかりが深いとされる中世初期の伝説的な人物です。金王丸の姿は、鎌倉時代に成立した『平治物語』にはじめてみることができますが、その後、謡曲・幸若舞曲・浄瑠璃・歌舞伎などで、彼の活躍が描かれるようになりました。一方、金王丸の伝承もここ渋谷をはじめ全国に存在しており、身近な兵（つわもの）として親しまれています。

今回は、金王丸に関する作品や伝承資料を展示しているほか、全国各地の伝承も映像を用いながら、金王丸がどのように人々に受け入れられてきたかについて紹介しています。



渋谷金王丸（渋谷武志氏所蔵）

明治渋谷の名産品と「松濤」の由来

「松濤」は、渋谷区の中でも高級住宅地として知られていますが、実はある植物の栽培園、あるいは商品名から生まれた地名であることをご存知でしょうか。

渋谷は今でこそ都会の代表のように言われていますが、百年ほど前は緑の広がるのどかな場所でした。渋谷が現在のように都市化してゆくのは、昭和に入ってからです。渋谷は江戸時代以降、都市近郊の農村として都市部で消費される作物などの生産地でした。しかし、農村が広がっていただけでなく、江戸の町に近い東側の広大な土地には、大名屋敷が広がっていました。この屋敷の多くは、都市部から離れた渋谷の立地を反映し、大名の隠居所・別荘・災害時の避難所・野菜などの耕作地として利用されました。

それが明治になると、大名家の土地の多くは明治政府に没収され、政府は広大な土地を手に入れました。しかし、それらの土地をそのままにしておくと、土地が荒れ、治安も不安定になる恐れがあるため、政府は桑・茶を栽培することを奨励しました。その結果、渋谷では茶が多く作られるようになりました。

茶の栽培は、初めはうまくいかず大変だったようですが、成功する者が出ると、それに習い急速に茶の生産者が増加しました。さらに、東京の郊外にあるという立地は、地方の産地よりも運搬にかかる日数や費用がわずかですみ、有利でした。しかも、茶は一般の畑作物よりも利益率が高いため、茶を生産する人が続出し、一時は茶業に従事する人が渋谷村地域だけで3千人に及び、「渋谷茶」として広く知られました。

茶園は東側だけでなく西側にも広がっていき、代々木地域などでも、茶の栽培が盛んに行われ「代々木は茶処」と広く知られました。そうした茶園の中でも松濤地域では、特に大規模に栽培が行われました。この地域は江戸時代紀州徳川家の屋敷でしたが、明治になり旧佐賀藩主鍋島家はその土地を買い入れ、茶園を開きました。そこで、その茶園と生産される茶に「松濤園」の名がつけられました。茶園と商品名とどちらが先につけられたのかはわかりませんが、これが現在の地名の元となりました。実はこの名前は洒落た意味があります。茶の湯の世界では、釜のたぎる音を風流に「松風」と表現します。これをひとひねりして、松に吹く風音を波音に例え、「風」の文字に「濤」の文字をあて「松濤」としたのです。それを、茶園と生産される茶の名として「松濤園」としました。

こうして茶の生産地として知られた渋谷でしたが、明治22年(1889)東海道線の全面開通により本場の宇治茶が東京に大量に入ってくると、製茶業は急激に衰退し消えていきました。



明治末頃の茶畑（現在の猿樂町付近）



大正時代の渋谷を描いた大岡昇平

『俘虜記』『レイテ戦記』などで知られる作家大岡昇平は、幼少年期を渋谷で過ごしました。

彼はそのときのことを後年、自伝的小説『幼年』『少年』に描いています。「私は」「私が」と主張することを好まない大岡は「渋谷という環境に埋没させつつ自己を語るのが目的である」として、これらの作品を書きました。

明治42年(1909)に現在の新宿区に生まれた大岡は、現在の港区南青山を経て3歳のときに、現在の東二丁目にある氷川神社の近くに移り住みました。昭和5年(1930)までの間に、渋谷近辺を7ヶ所ほど移り住んでいます。

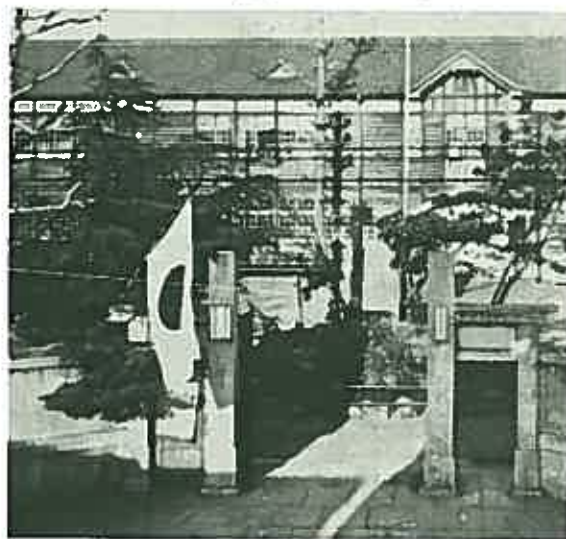
最初に住んだ氷川神社付近の家については、残念ながら記憶はないようですが、次に移った下渋谷521番地の家から、幼い頃のことを回想しています。そのあと、5歳のときに100メートルほど離れた下渋谷543番地に移り、さらに中渋谷180番地(現在の渋谷駅東口、渋谷川稲荷橋付近)に移り住みます。大岡は「中渋谷180番地の路地の環境が、私にとっては故郷なのではないかと思った」と書いています。当時、家のそばにあった田中稲荷(現在は移転して豊栄稲荷となる)の境内や、その脇に流れる渋谷川などが格好の遊び場でした。当時の渋谷川について、水が澄んでおり、川の上の所々で商家が家を建てていたことが記されています。

大岡は大正4年(1915)に渋谷第一尋常高等小学校(のちの区立渋谷小学校、現在は他校と統合して神南小学校になる)に入学します。

当時の渋谷小学校は現在の渋谷駅東口のバスターミナル付近にあり、渋谷川の護岸の石の上を歩いて通うのが楽しみだったそうです。

大正7年、9歳のときに大岡家は中渋谷895番地、現在の宇田川町に移り住みます。宇田川べりにあったその場所について、大岡の母は「山家へ来たような気がする」と言っています。少し北にゆくと、代々木練兵場(現在の都立代々木公園)付近に当時はまだ牧場があり、弟のためにしぼりたての牛乳を買ってきた記憶をつづっています。このあとさらに中渋谷716番地に移り、21歳のときに渋谷を離れます。

渋谷地域を何度も転居した大岡は、彼と同じように幼少年期の渋谷を描いた文芸評論家・奥野健男の『文学における原風景』についても触れ、「氏のように一貫して同じ場所に住んでいた人に比べると、同じ土地についてもその感覚はゆれ動いている」と書いています。



大正13年頃の渋谷小学校

収蔵資料紹介

与謝野晶子『みだれ髪』初版本

明治34年(1901) 東京新詩社・伊藤文友館刊
タテ19.3cm、ヨコ8.4cm 139頁 35銭

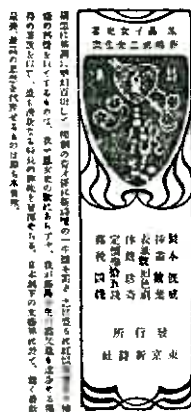


与謝野晶子の代表作といえ
ば、誰もがこの『みだれ髪』を
あげるのではないだろうか。

晶子の処女歌集で、旧姓の鳳晶
子の名前で発行された唯一の
歌集は、出版と同時に、短歌界
だけではなく社会を揺るがし
ます。晶子の歌は旧来の歌の常
識を破り「やは肌のおつき血汐
にふれも見てさびしからずや
道を説く君」「春みじかし何に
不滅の命そとちからある乳を
手にさぐらせぬ」など、恋愛を
讚美する官能的なものだった
からです。雑誌『明星』に発表
した三九九首の歌は、『みだれ
髪』刊行にあたって、「臙脂紫」
「蓮の花船」「白百合」「はたち
妻」「舞姫」「春思」の六章に編
集されました。

このサイズの本は、当時は
珍しかったようで、『明星』
の第一四号(明治三四年八
月)には「製本の体裁も亦意

匠を変更致し候(中略)出版物
の一進歩と存せられ候」と記さ
れています。また、誌上でも『み
だれ髪』出版は大々的に広告さ
れています(左写真参照)。本
の装丁と挿絵は藤島武二が手
がけ、本書の三頁には、表紙の
矢から吹き出でた花が詩を意
味していることが説明されて
います。各章に添えられた挿絵
も斬新で、晶子の歌とよく調和
しています。『明星』の本拠地・
東京新詩社は、創刊号から明治
四一年の一〇〇号まで渋谷に
ありました。当時の若者たちは
この『みだれ髪』を着物の胸や
袂に忍ばせ、胸を熱くしてい
たことでしょう。



大取次
文友館
東京

『明星』第16号 明治34年10月より

【今後の展示予定】

企画展「新収蔵資料展」

平成19年4月3日(火)～5月6日(日)

*平成18年度に収集した資料を展示紹介します。

企画展「渋谷駅とその周辺写真展②」

平成19年5月10日(木)～6月24日(日)

*昔の渋谷駅西側地域の写真を展示します。

企画展「原宿のむかし写真展」

平成19年6月28日(木)～8月12日(日)

*昔の原宿・神宮前地域の写真を展示します。

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 9:00～17:00(入館は16:30まで)

休館日 ◆ 月曜日(休日の場合はその直後の平日)・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円)・小中学生:50円(40円)

※ 10名以上の団体料金

※ 60歳以上の方、障害のある方と付き添いの方は無料

お問合わせ ◆ 東京都渋谷区東1丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.4

平成19年3月1日発行